



Title	物言わぬモノ、モノ語る人：一九世紀日本の古物趣味と歴史認識をめぐって
Author(s)	表, 智之
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43329
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	おもて とも 之
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 6 5 0 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 13 年 9 月 21 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本文学専攻
学 位 論 文 名	物言わぬモノ、モノ語る人 ——九世紀日本の古物趣味と歴史認識をめぐって——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 中村 生雄 (副査) 教 授 川村 邦光 助教授 富山 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本の19世紀における知の性格と変遷のありようを、日本の内発的なものであるか、それとも西洋からの外来の所産であるかといった、旧来の不毛な二者択一の視点からではなく問い直そうとする、新たな思想史の試みである。そこでは、寛政期の知識人による「古へ」にたいする旺盛な関心の形成を契機として、それが日清・日露の「世紀転換期」にいたるまでの100年間に、近代的な考古学・人類学・古代史学といった学問的な知のシステムへ再編成されていくプロセスが考察の対象とされる。そのうえで、当該期の知識人もしくは読書人ネットワークの存在やその相互交流、知識の流通形態といった側面に注目しながら、そこに見られる学術的な知の形成とその時代的な特質が追求される。序章と終章のほか本論は4章からなり、分量的には400字詰め換算で295枚といったコンパクトなものながら、豊富な情報と的確な分析が盛り込まれた思想史研究の意欲作である。

「序章 課題と方法」では、本論文の全体的な意図が提示されたうえで、研究上の基本的な視点が明らかにされる。申請者の視点によれば、当該期の知識人・読書人の「古へ」にたいする関心は、仁斎・徂徠とつづく古学の展開、宣長の国学的な「古代」の発見をうけて、すでに近世的な学派・学統内の知識としては収まりきらないものとなっており、そうした時代的な状況のなかで、古物にたいする該博な関心と「古へ」への新たな視線の基礎がきずかれていたとする基本的な視座が提示される。

「第1章 読書人ネットワークと観察の技法」では、18世紀末から19世紀初頭にかけての古物趣味を胚胎していった好事家たちのサークルの実態を考察する手がかりとして、以文会や耽奇会、さらには木内石亭の弄石柱といった、既成の学問体系にとらわれない同人サークルやコレクターの動きが検討される。そこには、「古へ」への関心をテコに領域横断的に人が集まり、古物と典籍をモノとして観察し、記録し、その成果を多くの人と共有することがめざされたというところに、新しい性格があったとする。

「第2章 歴史の闖入者—志賀島金印問題」では、天明年間の志賀島の金印発見事件を手がかりとして、古代の出土遺物というものが、当時の知識人の歴史認識にどのような衝撃を与えたのか、また遺物というモノが突きつけられることによって彼らがこうむった歴史認識の動揺がどのように防衛されていったのかが検討され、当該期における古物をめぐる知のありかたの類型化が行なわれる。

「第3章 物語とモノ語り—『本朝度攷』論争」では、古物がモノとして独自の時間のなかに存在してきたことが認識され、そうしたモノとモノとを互いに対照させ、再配列することで歴史を構成する知の技法の成立が、屋代弘賢

らの畿内寺社宝物調査における金石文の収集記録を例に検証される。

「第4章 「文」の在処—『衝口発』論争」では、以上のようなモノにたいする関心の背景となる当該期の知識の全体的なありかたが俯瞰されることになるが、そこではとくに従来の有職故実的な知識の集積がその対象を雅の領域から俗の領域へとおしひろげ、結果的にのちの民俗学の対象となる事項に関心が向かったこと、また、こうした雅と俗の階層差と組み合わせて「古へ」と今を分かち時間差の視点が導入され、そこに文化なるものの壮大な漸進図が構想されたことを指摘する。

「終章 古物趣味と明治の古代表象」では、明治初年の博物館行政にたずさわった黒川真頼と人類学者・坪井正五郎の対照的な立場を例に、近代的な歴史認識の特質と問題性が提示され、また本研究全体の総括と残された問題点が論及される。

論文審査の結果の要旨

本論文前半部の、18世紀末から19世紀初頭における知識人・読書人のグループが、社会的な地位や身分はもちろん、既成の学派や人脈からも離れて新しい知識と情報のネットワークを組み上げていった状況、さらにはそうした動向の中心に「古へ」への飽くなき関心が醸成され、その関心をささえるところの具体的なモノ、すなわち多様な事物を史料として収集し、保存し、記録し、またそれを情報として発信していく時代状況を、詳細にあとづけ、そこで獲得され供給されている知識の様態と性格を的確に把握したことは、本論文の特筆すべき成果である。それと並んで、たとえば志賀島出土の金印問題にかかわって知識人が発したさまざまな解釈を通じて、同時代における「日本」という自己像の動揺と防衛の複雑な側面を明解に整理して提示し、その事件を当該期の思想史上の問題として再構成しえた力量にはすぐれたものがある。また、第4章で提示される「古へ」にたいする歴史認識の枠組みにかんする試論を通じても斬新な視点がしめされており、それは今後の理論的な整備によって大きな成果をあげるだろうことが予見される。

とはいえ、本論文後半部分においては、近世的な歴史認識と近代的なそれとの連続と断絶の思想的・学説史的な考察が手薄になっており、序章の研究目的でかかげたところの、あえて「19世紀」の枠組みを提示して行なう思想史構築の企てが、予告どおりには完遂できていないという憾みものこる。とりわけ、序章でその意義を積極的に評価している近年の国民国家論からの問題提起を受け止め、それに呼応するかたちで、新しい「19世紀思想史」の全体像を明瞭なかたちで提示するところまでいかなかったのは、冒頭にかかげた本研究の意図と方法が魅力にみちているだけに惜まれる。

このような難点があるものの、本論文はそれを補うにたる意欲的な構想と周到な分析力が随所にみちており、博士(文学)の学位を授与するにふさわしい内容を有するものと認定する。